

David C. Cole and Betty F. Slade,
*Building a Modern Financial
System: The Indonesian Ex-
perience.*

Cambridge: Cambridge University Press, 1996,
xxvii+379 pp.

伊藤 成朗

近年、金融の持つ機能が経済発展に不可欠であるというシュムペーター以来の考えが、さまざまな形で論証されるようになってきている。理論では、金融仲介機能やリスク分散機能などに着目し、金融システムの効率化が成長を高めることが指摘されている。実証では、金融の発展段階を表すさまざまな指標が成長とプラスの相関を持つことが確認されている。

では、実際に効率的な金融システムを構築するために、途上国の政策立案者は何をすればよいのだろうか。この難問に対し、28年間インドネシア大蔵省でアドバイザーとして活躍してきたデーヴィッド・コール、同じく7年間務めてきたベティ・スレイドの著書は、実践的なアイデアを提供してくれる。

本書は、スハルト政権成立以降の金融システムの変遷について、11章にわたって分析している。分析対象は銀行に留まらず、資本市場、保険、年金、ファイナンス・カンパニー、未組織金融、金融政策と幅広い。インドネシアの金融の全体像を伝える書物が少ない現状では、貴重な貢献である。

本書の提供する興味深い論点のひとつに、金融の国際化が金融システム形成に与える影響がある。インドネシアは1960年代後半に国際資本移動を自由化し、いかなる政策も資本移動への影響を考慮することなく実施することが難しい状況にあった。

インドネシアのような金融小国で資本移動が自由であると、国内の金融的ショックは資本移動によって相殺される傾向がある。スカルノ政権末期のハイパーインフレーションの記憶と自由な資本移動は、

伝統的に財政金融政策に節度を与える役目を果たしてきた。同時に、自由な資本移動はオフショア取引を可能にし、利子率や信用総額への規制の効力を削ぐ効果があった。このように、インドネシアの経験からは、資本移動を自由化し、金融システムが国際金融市場のチェックを受けるようになると、拡張的政策によって政府が金融システムにショックを与えることが難しくなると同時に、政府によって作られたデスティーションの効果も減じられる傾向が見て取れるようになる。

金融抑圧が経済発展にマイナスであるという冒頭の主張からすれば、資本移動が自由であることは、成長低下を招く政策を政府に採用させなくさせるという意味で好ましい。このことは、国際資本移動を自由化する前に国内金融市場を自由化すべきとする「自由化の順序」の議論とは対照的である。

次に指摘できるのは各章における政策決定過程の分析である。著者も述懐しているとおおり、インドネシアでは金融政策の決定過程が外部に知られることはほぼ皆無であった。金融改革を進めるうえでいかなる困難が待ち受けており、実際の決定がどのような妥協の産物かを知ることは、効率的な金融システムの構築を考える者に限らず、政策決定過程を研究する者にとっても有用であろう。

こうした分析が可能であったのは、著者が政策アドバイザーであり政策決定者ではなかったこと、著者が在籍していた大蔵省の銀行監督権限が弱かったこと、つまり、政策情報は十分に入手できるものの、決定過程に直接関与しなかったことの結果であると考えられる。類書がないだけにこうした情報は資料的に貴重であり、この成果を踏まえて、今後さらなる分析の深化が望まれる。

どのような問題が発生し、どのような過程を経て対応が決まるのか、対応が成功・失敗した要因は何かを探るといって本書の一国金融史のアプローチは、モデルを構築して金融システムと経済発展の関係を計量的に検証する各国横断的アプローチを補完するものである。他国に関しても本書のような労作が執筆されることを願って止まない。

(アジア経済研究所海外派遣員、在ブローウィデンス)